

JACET Journal 48 (2009) 81-93

メタファーで学ぶ詩学 — 認知言語学の観点から —

Metaphors Help Students Comprehend Poetry: From a Cognitive Linguistics Perspective

TANIMURA, Midori

Kyoto University of Foreign Studies

NAKAMOTO, Koichiro

University of Yamanashi

Abstract

In this study we will explore how metaphors help students comprehend poetry from a cognitive linguistics perspective. A metaphor in cognitive linguistics is not just a figure of speech but is pervasive in everyday language as well as in poetry and fiction (Lakoff & Turner 1989). For example, when English speakers say “we still have a long way to go,” they understand life as a journey: LIFE IS A JOURNEY. In this paper we put a special focus on the mega-metaphor which is a type of metaphor effective to develop ideas in poems. It occurs repeatedly throughout a text and works like a central theme. Through the course the students learnt metaphor as a strategy to comprehend and interpret texts and to learn how language works to convey meaning. We analyzed 26 term papers on conceptual metaphors which were developed at poetry in order to evaluate and monitor the students’ understanding. We found out that the students for the first couple of months had great difficulties finding metaphorical expressions in light of conceptual metaphors. However, they enjoyed reading poetry once they acquired the strategies for reading it. In the end they were able to read poems as independent learners.

Key Words: メタファー 詩学 認知言語学 授業研究

1 はじめに

本稿は、大学生を対象とした認知言語学の概念メタファーを利用した詩の理解・学習についての実践報告である。従来までの詩の指導方法は、教員が読解の前指導として、詩に関する記事や背景になる文化的・歴史的知識を与える、押韻や韻律など詩の音声的な特徴に注意を促す、語彙や文法、語順の倒置など統語的な技法を確認するといったものであった。これらの方法は、クラス活動として詩を学習する際には役立つが、高度な知識を前提とするため、学習者が一人で詩を読む際には利用しにくく、詩への興味・関心は高まらない (Collie & Slater 1987; Carter & Long 1991)。本稿では、そういった従来の指導法の問題点を踏まえ、概念メタファーを利用することで、学習者の自律的な詩の理解を可能にする方法を提案する。

2 認知言語学から見た詩の理解

2.1 先行研究の問題点と本研究の意義

言語学の成果を文学、特に、詩の理解の教育に応用した研究として Widdowson による一連の研究 (Widdowson 1975, 1992) がある。Widdowson は、従来までの詩の鑑賞や批評を乗り越える手段として、文体論 (Stylistics) に基づく詩の授業を提案している。例えば、詩の順番を入れ替えて創作させる、詩の空所を作って補充させる、オリジナルの詩と散文に書き換えられたものを比較させるなどの方法である。これらの方法は、構造主義言語学やハリデーの機能主義言語学の流れを汲むもので、基本的に詩の形式的な側面に注目した分析となっている。

こういった形式面を重視した指導は、少なくとも語彙や表現など内容理解に問題がない英語母語話者や上級の英語学習者に対しては効果的である。しかし、日本の大学生のように詩の理解に困難を感じる中級レベルの学習者にとっては必ずしも適切とはいえない。そこで今回は、音声や文法など詩の形式面ではなく、意味的・概念的な理解を促進するアプローチとして、認知言語学の概念メタファーを応用する。

2.2 概念メタファーと認知詩学

認知言語学という概念メタファーは、日常言語を成立させる重要な概念基盤として提唱されている。例えば、*We're at the crossroad.* や *It's been a long bumpy road., Look how far we've come.* といった表現は、物理的な移動や旅行だけでなく、恋愛や仕事といった人生の展開を表わすこともある。ここで重要なのは、こういった比喩に用いられるメタファー表現が体系的に現れるという点である。

例えば、これらの表現において、人生は道のり (*how far*)、選択は分れ道 (*crossroad*)、困難は障害 (*long bumpy road*) として概念化されている。認知言語学では、こういった表現が可能なのは、個々の表現が多義的な意味を持つからではなく、*Life is a Journey* (人生は旅である) という概念基盤があるからであると考えられる。また、こういった概念メタファーは日常的な言語使用のかなり多くの部分を占めることが指摘されている。

最近では、概念メタファーは、日常言語だけでなく、文学作品や政治的な討論、さらに、広告や新聞などの分析にも用いられるようになっている。特に、文学作品のメタファー分析の先駆けとなったのが、Lakoff & Turner (1989) による認知詩学 (Cognitive Poetics) であり、その後、Gibbs (1994) や Stockwell (2002)、また、論文集としては Semino & Culpeper (2002) や Gavins & Steen (2003) として展開している。

2.3 概念メタファーによる詩の分析 —— 〈人生は旅である〉を中心に

以下は、Robert Frost の "The Road Not Taken" という詩の最後の部分である。

Two roads diverged in a wood, and I —

I took the one less travelled by.

And that had made all the difference.

この詩の背後にあるのは先に見た〈人生は旅である〉という概念メタファーである。この詩において、主人公は人生の岐路に立っており、古人が歩んだ平坦な道ではなく、まだ踏みならされていない険しい道を選んだことが表わされている。

同様の概念メタファーは、聖書にある有名な聖句「狭い門から入りなさい (Enter through the narrow gate.)」や、「僕の前に道はない。ぼくの後ろに道は出来る」という高村光太郎の詩など、日英語を問わず用いられている。このように、概念メタファーは、表現

の基盤となるアイデアといってよいだろう。

さらに、〈人生は旅である〉というとき、具体的な旅の手段が特定化されることもある。次の詩は、“My Soul In Sad Exile”という有名なキリスト教の聖歌で、人生の荒波に溺れそうになっていた人が、キリストに出会い救われることを歌った詞である¹。ここでは人生は船旅にたとえられており、苦しい人生は wild seas（荒波）として、心の平安は rest（休息）や anchor（停泊）として表わされている。

I've anchored my soul in the Haven of Rest,
I'll sail the wide seas no more;
The tempest may sweep over wild, stormy, deep,
In Jesus I'm safe evermore.

つまり、〈人生は旅である〉というメタファーは、徒歩や船旅、車や飛行機による旅といったかたちで、より具体的な旅として概念化される。この詩には出現していないが、その他にも、smooth sailing や on the rocks や foundering などは船旅に基づく表現であり、long bumpy road や dead-end street, spinning our wheel などは車による旅を想定している。このように、概念メタファーは抽象度によって異なるレベルで提示される。

なお、今回行った授業では、英米詩に現れたメタファー表現を学習者に分析させる際、なるべく具体的なレベルで考察させた。そのほうがより深い理解に到達できると考えたからである。その他、詩の分析において学習者に次のような点に注意するよう促した。

2.4 詩の分析における三つの注意点

第一は、直喩（simile）と隠喩（metaphor）の区別をするという点である。直喩とは、一般に「～のような（like ～）」という形式で、あるものをあるものに喩えることであり、隠喩とは、そういった形式を用いずにそれらを表現することである。例えば、Juliet is like the sun. という場合が直喩で、Juliet is the sun. という場合が隠喩にあたる。今回の分析では前者の直喩は取り上げないことにした²。それは隠喩に注目することで、これまで見落としてきた詩の概念的な構成を理解してほしかったからである。

第二に、すべての詩作品が統一した概念メタファーによって構成されているわけではないことにも注意が必要である。作品中のほとんどの概念メタファーは一回性の断片的なものである。例えば、Alfred Tennyson の“Enoch Arden”には、次のようなメタファー表現が用いられている。これらの表現は〈〉内に示した概念メタファーを断片的に用いているが、これらは“Enoch Arden”という作品全体に通底する概念メタファーではない。

the dawn of rosy childhood 〈A Lifetime is a Day〉
my sorrow broke me down 〈Sad is Down〉
too hard to bear 〈Difficulty is a Burden〉

認知詩学では、このような個々の断片的なメタファーをミクロ・メタファー（micro metaphor）というのに対して、詩作品全体に流れるメタファーをメガ・メタファー（mega metaphor）という³。今回の授業では、詩の全体像を理解させるという目的があったので、個々

1 このことは、日本語で救済を表す「救う」という動詞が、水の中にあるものを「掬う」という言葉に由来することを考えると深い意味を感じる。この詞は日本語では次のように翻訳されている。

「人生の海の嵐に揉まれきしこの身も、不思議なる神の手により命拾いしぬ
いと静けき港に着き、我は今休ろう。救い主イエスの手にある身はいとも安し」

2 直喩は、明示的に表現されるため、概念メタファーという道具立てがなくても理解できるが、隠喩（メタファー）は、テキストの中に隠れていて気づきにくいいため、今回はこちらに焦点をあてた。

3 ただし、後述する学生の分析からもわかるように、メガ・メタファーは1作品に対して1つとは限らない。

のミクロ・メタファーにこだわるのではなく、作品全体の概念的な理解を可能にするメガ・メタファーに注目させた。

第三は、詩人や時代によって概念メタファーが多用される場合と、それらがほとんど現れない場合があるということである。英米詩の分類にはさまざまな基準があるが、メタファーという観点から見ると、日常的な出来事をそのまま詩にした作品や、William Blake の“The Tiger”のような高度に象徴化された作品は今回の分析になじまないことがわかる。そこで、今回は概念的な分析が可能な抒情詩を中心に取り上げることにした。

2.5 概念メタファーとイメージの図式化

詩は、概念としてだけでなく、感覚やイメージとして理解することが重要である。そこで、今回の授業では学習者に、概念メタファーを言葉で提示するだけでなく、それらを図式化することを求めた⁴。最近の学生はビジュアル表現を得意とするが、今回のような図式化はある程度の抽象化が必要となるため、図式化の方法がわかるように次のような具体例を提示した。

以下は、〈Life is a Journey〉と〈A Lifetime is a Day〉を図式化したものである。人生は旅に喩えられる場合もあれば、一日や一年に喩えられることもある。例えば、the dawn of childhood は幼年期を、the spring of one's life は青年期を、また、evening twilight や the autumn of one's life は老年期を表わす。これらの表現は、人間の一生が均質なのではなく、昼夜や四季のように多様な局面からなっていることに基づく。

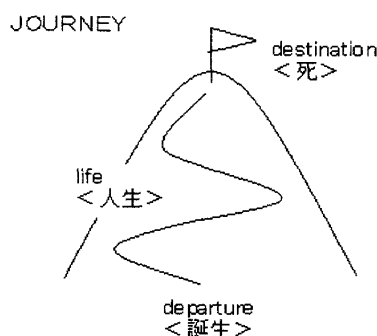


図 1. Life is a Journey

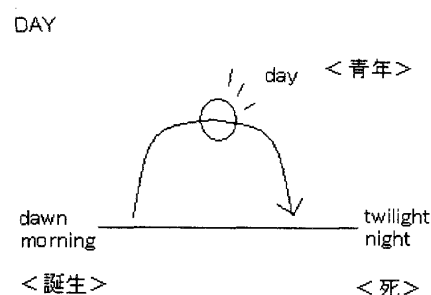


図 2. A lifetime is a Day

次の図は、〈Life is a Plant〉というメタファーを図式化したものである。例えば、budding friendship (友情の芽生え)、blossom of youth (青春真っ盛り)、efforts bear fruit (努力が実を結ぶ)といった表現は、人間の成長を植物の生長に喩えたものであり、成長の段階(努力や達成)が植物の段階的な生長として表現されている。ただし、これらの表現は英語よりも日本語に豊富なメタファーであるといえるかもしれない(Cf. 初山 2006)。

4 図式化によって、学生たちは互いに英詩の理解を深めることができ、また、英詩にも入り込みやすくなる。ただし、これはあくまでも補助的なもので、ヴィゴツキアンというスキヤフォールディング、つまり、困難な課題に対する支えとして、最終的にはこういった図式化なしに理解ができるようになることが望ましい。

PLANT

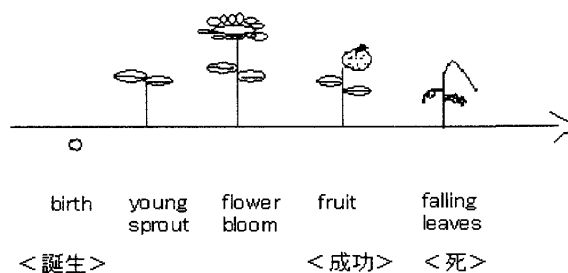


図 3. Life is a Plant

次の図は〈Life is a Burden (人生は重荷である)〉や〈Life is Bondage (人生は束縛である)〉を図式化したものである。例えば, bear some hardship は苦難に耐えることを, trapped in deep poverty は貧困に苦しむことを表わす。このとき, 苦難や貧困はそれぞれ burden (重荷) や cage (囚檻) として概念化されている。また, そういった人生の困難から逃れることを emerge from hardship や escape the poverty などという。

BONDAGE

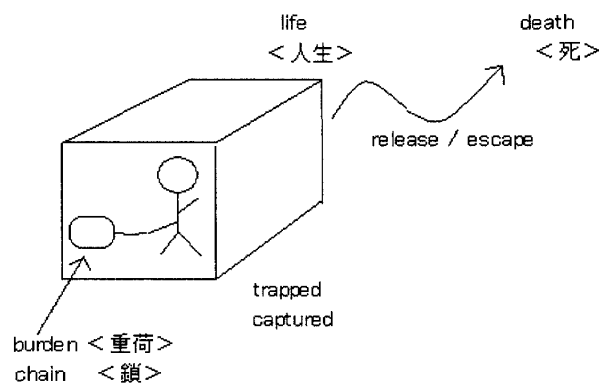


図 4. Life is a Bondage

このような概念メタファーの図式化により, 単語の意味だけを調べてもわからなかった作品のイメージを視覚的に捉えることが可能となる。また, こういったイメージの視覚化により, 学習者は詩作品全体に流れる詩人の人生観や世界観にも触れることができる。さらに付け加えるならば, こういった認知詩学の試みは, 従来までの文芸批評を越えた新たな文学研究の可能性を開くものとも考えることもできる。

3 授業活動

3.1 授業目標と調査参加者

授業目標は, 学習者にメタファー概念を用いて英詩を分析させ, 理解させることであり, 最終的に学習者が主体的に詩を読む姿勢を持つようになることである。授業参加者は, 関西の大学の4年生(英語専攻)26名で, 必修科目に用意されている講義のなかから各自の希望で選択履修し, 最後に5～10ページの英文エッセイが課される。

3.2 教材

今回用いた教材は、メタファーの代表的な教科書 Kövecses (2001) である。授業の前半で学生は、概念間のマッピングやメタファーの体系性など、認知詩学の基礎となる考え方を学習した。また、メタファー表現が日常的なものであること、文学作品に出現するメタファーを特異なものとして扱わないこと、普遍性の高いメタファーと文化的背景によって異なるメタファーがあることなどを様々な具体例とともに学習した。そして、作品全体に渡って繰り返し現れるメガ・メタファーについても学習した。

3.3 タスク

先に指摘したとおり、すべての詩にメガ・メタファーが使用されるわけではない。そこで、事前に教師が様々な詩集をあたって、学生に参考となる詩集を提示することにした。調査の結果、イギリス・ロマン派、ビクトリア朝の詩人の作品にメガ・メタファーの出現が多いことがわかったので、今回はロマン主義を代表する詩人 William Blake, William Wordsworth, John Keats などの詩集を提示した⁵⁶。

また、予備的に学生に詩を分析させたところ、いくつかの点で十分に理解できていないことがわかったため、以下のような指示を与えた。

- (1) 「～のような (like ～)」の表現が出てくる詩は選択しないこと
- (2) 十分な長さのある詩を選択すること
- (3) 語彙の出現に一貫性のあるものを選択すること
- (4) Life is a Journey/ Love is a Journey は、どのような手段で旅をしていたか (journey by ship / journey by car / journey by airplane) で、時代背景や文化的背景もわかるので、なるべく具体的なレベルでメタファーを分析すること
- (5) 概念メタファー A is B の A B は名詞にすること
- (6) 擬人法になっている詩は1つまでにして、他の詩を探すこと (例: Human beings are Animals / Human beings are Plants がたくさん出てくる人は要注意)
- (7) 分析する3つのうち1つは歌の歌詞でもかまわない

4 結果

以下に、メガ・メタファーの分類 (4.1)、学生の詩の分析例 (4.2)、詩の分析における感想 (4.3) の順に述べる。

4.1 メガ・メタファーの分類

どのようなメガ・メタファーが詩で使用されているか統計を取ると (資料1参照)、人生に関するメタファーが出現している詩が26篇 (延べ数、以下同様)、愛に関するメタファーを扱っている詩が21篇となっている。人生や愛は、概念メタファーの中でも典型的なものであるが、ロマン派文学が開花した時代には、自然や人生、愛、生活、感情・思想などを普通の言葉で歌うものが多かったことが影響していると考えられる。

次に出現数が多いのが、時間の推移を扱ったもので11篇の詩に現れている。なかでも人生の終局である死に関連するものが最も多い。青春や恋愛などが人生を謳歌するものであるのと同様に、死もすべての人に訪れる出来事で、詩の題材として選択されやすいことによるものと考えられる。また、詩の技法として擬人法を用いたものが8回、感情が4回、

5 平井正穂 (編) (1990) 『イギリス名詩選』 岩波文庫。松島正一 (編) (2004) 『対訳 ブレイク詩集—イギリス詩人選〈4〉』 岩波文庫。山内久明 (編) (1998) 『対訳 ワーズワス詩集—イギリス詩人選〈3〉』 岩波文庫。

6 現代詩や象徴詩にこの概念が適用できないのはこの方法論の限界といえる。

その他が6回出現している。

4.2 詩の分析例

ここでは、学生による詩の分析例を2つ紹介する。1つ目は、典型的なメガ・メタファー〈Life is a Journey〉が現れた Christina Rossetti の“Uphill”の分析例である。ここで、メガ・メタファーを支えているのが、詩に散りばめられている語彙表現、つまり、ミクロ・メタファーである。実際の分析では、詩に明示されている表現が何に見立てられているかを対応づけることによって進められる。

Uphill

by Christina Rossetti

Does the road wind uphill all the way?

Yes, to the very end.

Will the day's journey take the whole day?

From morn to night, my friend.

But is there for the night a resting place?

A roof for when the slow, dark hours begin.

May not the darkness hide it from my face?

You cannot miss that inn.

Shall I meet other wayfarers at night?

Those who have gone before.

Then must I knock, or call when just in sight?

They will not keep you standing at the door.

Shall I find the comfort, travel-sore and weak?

Of labour you shall find the sum.

Will there be beds for me and all who seek?

Yea, beds for all who come.

以下に示す〈Life is a Journey〉のメタファーの対応関係で、起点領域 (source domain) は具体的な旅という行為を喚起する概念を指し、目標領域 (target domain) はそれによって実際に表わされる人生に関する概念を指す。

表 1. 起点領域と目標領域の対応関係

Source domain	→	Target domain	Source domain	→	Target domain
the road	→	life	the slow, dark hours	→	death
end	→	death	that inn	→	death
journey	→	life	the door	→	the end of life
morn	→	birth	the comfort	→	death
night	→	death	travel-sore and weak	→	depression in life
a resting place	→	death	the sum of labour	→	hardworking-ness in life

この学生の対応表では、人生の困難を示す wind uphill や人生の休息を示す bed などの分

析が抜け落ちてはいるが、概して適当なメタファーを抽出できている。特に、この詩では、〈Life is a Journey〉と〈A Lifetime is a Day〉という二つのメタファーが共起しており、それらがともに理解されている点は注目に値する。例えば、〈Life is a Journey〉に関する事例としては、人生の困難が *travel-sore and weak* や *the sum of labour* として表現されており、また死が *a resting place* や *that inn* として描かれていることに気づいている⁷。この詩の概念図は、次のように示されている。

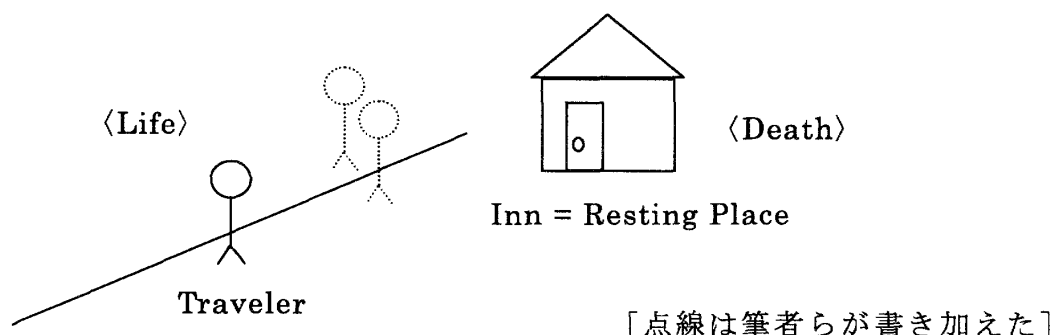


図 5. 詩のイメージ図

ここで、ベッド＝死の床は描かれていないが最終的に安らかな眠りにつくことに気づくことができている。また、詩の中間で描かれている *wayfarers* という言葉に気づくならば、点線で示した人々が先に死んだ先達であることが指摘できただろう。また、この絵のなかに同時に描くことは難しいかもしれないが、この旅が朝 (*morn*) とともに始まり、夜 (*night*) とともに終わる旅であることも表現できるとさらによいように思う。

2つ目は、〈Time is a Destroyer〉が出現している詩の分析例である。

Like as the waves make towards the pebbled shore

by William Shakespeare

Like as the waves make towards the pebbled shore,

So do our minutes hasten to their end,

Each changing place with that which goes before

In sequent toil all forwards do contend.

Nativity, once in the main of light,

Crawls to maturity, wherewith, being crowned,

Crooked eclipses 'gainst his glory fight

And Time that gave, doth now his gift confound.

Time doth transfix the flourish set on youth,

And delves the parallels in beauty's brow,

Feeds on the rarities of natures truth,

And nothing stands but for his scythe to mow;

And yet, to times, in hope, my verse shall stand,

Praising thy worth, despite his cruel hand.

⁷ 概念メタファーは、作品における最低限の客観的な理解を促進するための道具であり、個人の自由な解釈を妨げるものではない。

表 2. 起点領域と目標領域の対応関係

Source domain	→	Target domain	Source domain	→	Target domain
minute hasten	→	time flow	delve	→	take away
all forwards	→	time flow	feed	→	take away
confound	→	take away	scythe	→	time
reaper	→	time	mow	→	take away
gift (=crop)	→	life (time)			

先の詩と同様に、この詩も大きく二つのメタファーにより成り立っている。ひとつは〈Time is a Moving Object (動く時間メタファー)〉で、時間は観察者である主体の眼前を過ぎ行く物体とみなされている。この学生はこれを **time flow** として正しくとらえている。もうひとつは〈Time is a Destroyer (時間は破壊者である)〉というメタファーであり、これは **confound** の日本語訳が「破壊者」とされていることに反映されている。

ただし、この学生は時間を破壊者という抽象度の高い概念で一般化せず、**scythe** (鎌) や **mow** (刈り取る) という語の背景にある〈Time is a Reaper (時間は収穫者である)〉というメタファーとしてまとめている。しかし、**transfix** (蹂躪), **delve** (刻みつける), **feed** (食い荒らす) といった表現を考慮するならば、これらの行為は **take away** (= **reap**) よりも **destroy** の一種とみなす方が正確であろう。

この詩の概念図は、次のように示されている。

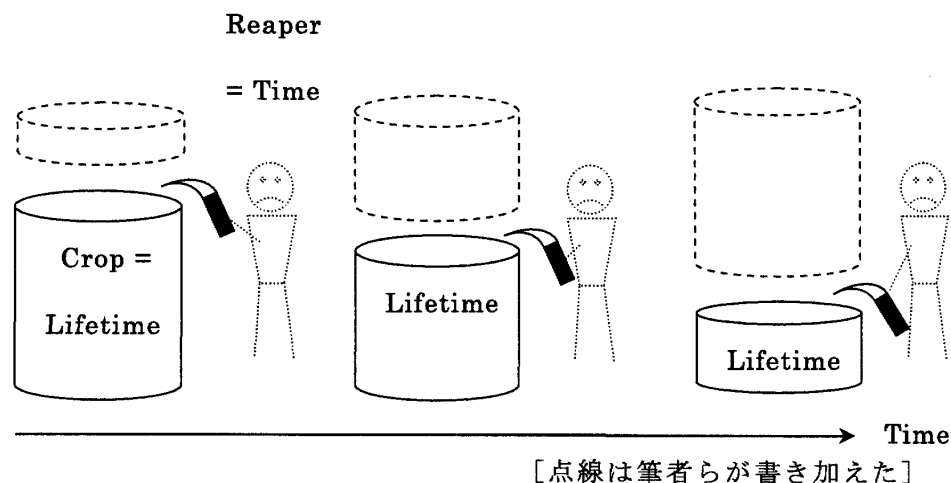


図 6. 詩のイメージ図

ここで図示されているのは、**nothing stands but for his scythe to mow** という部分を中心にしたメタファーである。ただし、ここで **scythe** (鎌) だけが勝手に動くのではなく、その鎌の所持者 (= **reaper**) が時間であり、これは擬人化された破壊者として図示すべきであろう。さらに、この図式は詩の部分的な図式化であり、**gift** (賜物) として与えられた人生の時間が収穫される **crop** (作物) としてだけでなく、食い荒らされる **food** (食物) としても概念化されることなどが図示されていればなおよかったように思う。

4.3 詩の分析に関する感想

感想を分類すると以下のようになる。

【発見の喜び】

- ・ 何が無に置き換えられ、対応しているのか、がわかったとき、とてもうれしくなる。
- ・ 最初に読んだときに考えたこととはまったく違うことが見えてくるので面白かった。
- ・ これまで、文章や言葉による表現方法には限界があると思っていたが、それは単に私が言葉による表現にあまり興味がなかつただけで実は広い可能性があるということをメタファー表現の学習を通じて学んだ。

【詩人の意図を読みとる】

- ・ 詩（作者）のほんとに言いたいことというのがわかった気がした。
- ・ 隠された本当の作者の思いがメタファーに表れていると感じた。
- ・ 何らかのメッセージや違う意味が隠されていると思った。
- ・ 詩の内面に潜む作者のイメージが膨らむようになった。
- ・ 何気なく読み過ごすのではなく、メタファーをしっかりと理解することで筆者や作者の言いたいことを理解することにつながると感じた。

【詩の理解におけるストラテジー】

- ・ メガ・メタファーは、詩を理解するのに便利である。
- ・ メガ・メタファーは、自分が詩を作るうえでの一つの技法のように感じられた。
- ・ メタファーをわかりやすくイメージできるようになった。
- ・ 今まで、「喜びや怒りがあふれてきた」という文章があっても、きっと嬉しいのだろう、怒っているのだろうと思う以外には特に感じることはなかった。しかし、授業でメタファーについて考えるようになってからは、同じ文章を読んでも、今までとは少し捉え方が変わってきた。例えば今回分析した文章なら、心の中に容器があって、その中に喜びや怒りという感情が注がれている様子というのを頭の中でイメージできるようになった。
- ・ 一つの詩から、いかにイメージが膨らむか、それは読者に委ねられる。それを助ける手段として、メガ・メタファーの概念を用いることで、統一した一つの詩として理解することができることが分かった。

【詩人のストラテジー】

- ・ 詩はメタファーという表現を利用することで、読者にとって理解しやすい作品となり、詩の世界観を大いに膨らませる。つまり、上手にメタファーを日常生活に取り入れることで感情表現が豊かになり、円滑な意思疎通が可能になるのだ。
- ・ メタファーを使うことによって、いろいろな想像や考え、その背景などを読み手に読みとってもらおうとしているのだと思う。

【メタファー学習の効果】

- ・ メタファーを学習したことによって私の日常生活における表現のやりとりや理解が豊かになると感じている。メタファーの学習を通して私は人々が比喩的表現を利用する理由や今まで気が付かなかつた多くのことを知り、意識できるようになった。
- ・ 使いかた次第で、非常に深い意味、嘆きであったり、希望であったり、愛情などを表現

することができたり、そのまま使うと伝わりにくいことを効果的に簡潔に伝えることが出来ることが分かった。

- ・言葉の表現の豊かさを知った。

【習慣】

- ・深い部分まで読み取る習慣がついた。
- ・これまでは読み流していたことを、言い手、書き手の意図する、さらに深い部分まで推し測る習慣がついた。
- ・詩の読み方が広がった気がする。
- ・詩を深く読み、また、裏を読み、作者の心境を知ることができた。

【自律的学習へ】

- ・豊かな表現があふれており、詩（または本＝文字）を読むことで、幅広い世界を盛ることができし、時代を知ることでもできる。もっと詩に触れてみたい。
- ・これから詩を読むことが少しは楽しくなりそうだ。

【その他】

- ・この複雑な言葉が無意識のうちに理解している人間の能力は計り知れないと感じた。
- ・今回レポートでこれらの表現に触れ、自分の語彙の少なさを痛感した。なんとなく大まかなイメージをつかめるものの、言葉にできない。もうすこし読書をしよう、とあらためて教養をつけようと思ったレポートだった。
- ・国語が苦手で、じっくり詩を読んだことがなかったので、一つの詩を時間をかけて分析していくのはとても良い経験になった。

以上のことから、学生は、詩を読むためのストラテジーを手に入れたことにより、詩人の意図をくみ取り、内容を深く理解することができるようになっていることがわかる。また、メタファーの学習を通して、言語表現の豊かさ、人間が持つ能力にも気づくことができるようになっている。さらに、レポートを通して得た発見の喜び、詩を読むことの楽しさなど知的好奇心を育てる一助となったこともうかがいしることができる。

5 まとめ

本稿では、認知言語学の概念メタファーを分析の道具として、英語を専門とする大学生を対象に、文学的な感性を磨き、文学的理解を促進させるための授業を紹介した。本研究は、筆者らが前回行った授業実践報告（谷村・仲本 2007）の延長上に位置づけられるもので、認知言語学、特に、メタファー理論の成果を外国語学習に応用するもうひとつの試みといえる。

前回筆者らは、メタファー表現に現れた英語の発想の違いを通して、文化的な差異を意識化させ、異文化理解を促進させる授業を展開した。具体的には、日本人英語学習者に認知意味論のいう概念メタファーを学習させ、英語の映画台詞に出てくるメタファー表現を採集・分析させた。本研究では、日常の言語生活から遠いと思われがちな詩を取り上げ、鑑賞の手段として概念メタファーを利用した。

今回の授業は詩の理解に重点を置いたが、こういったアプローチは現代ポップスなどの歌詞や小説や物語などの分析にも応用が可能である。さらに、高度なタスクとして、メガ・

メタファーを与えて、詩を創作させるといったことも可能かもしれない。こういったアプローチを通して、今後多くの学習者が従来敬遠しがちであった詩に親しみを感じ、主体的に作品へと向かう姿勢を養っていくことが期待される⁸。

謝辞

本論文に対し査読者の方々から多くの適切な助言を頂きました。心より感謝いたします。

参考文献

- 粕山洋介 (2006)『日本語は人間をどう見ているか』研究社出版
- 谷村緑・仲本康一郎 (2007)「メタファーで学ぶ発想の違い—認知言語学の観点から」『JACET JOURNAL』第45号, 95-108
- Carter, R., & Long, M. (1991). *Teaching literature*. Harlow: Longman.
- Collie, J., & Slater, S. (1987). *Literature in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gavins, J., & Steen, G. (Eds.). (2003). *Cognitive poetics in practice*. London and New York: Routledge.
- Gibbs, R.W.Jr. (1994). *The poetics of mind: Figurative thought, language, and understanding*. New York: Cambridge University Press.
- Kövecses, Z. (2001). *Metaphor: A practical introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, G., & Turner, M. (1989). *More than cool reason: A field guide to poetic metaphor*. Chicago: Chicago University Press.
- Semino, E., & Culpeper, J. (Eds.). (2002). *Cognitive stylistics: Language and cognition in text analysis*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Stockwell, P. (2002). *Cognitive poetics: An introduction*. London: Routledge.
- Widdowson, H.G. (1975). *Stylistics and the teaching of literature*. Essex: Longman.
- Widdowson, H.G. (1992). *Practical stylistics*. Oxford: Oxford University Press.

8 英詩は英文学専攻の学生にしか必要がないのではという意見があるかもしれない。しかし、言語が文化的な産物であることを考慮するならば、専攻を問わず英詩を含めた文学作品に触れることは意義があるものと思われる。

資料 1

Target	Conceptual Metaphors	Poems	Total
人生	Lifetime is a day	Lo, in the orient when the gracious light by William Shakespeare	2
		Daffodils by Robert Herrick	1
		Do not go gentle into that good night by Dylan Thomas	1
	Lifetime is a year	Autumn: A dirge by Percy Bysshe Shelley	1
	Life is a journey	Uphill by Christina Rossetti	5
		歌 Where do we go from here by Alicia Keys	1
		Where lies the land by Arthur Hugh Clough	1
		Separation by Samuel Taylor Coleridge	1
		Virtue by George Herbert	1
	Death is departure	Crossing the bar by Alfred Tennyson	5
	Life is food	O taste and see by Denise Levertov	1
	Life is a plant	To the virgins, to make much of time by Robert Herrick	3
		The last rose of summer by Thomas Moore	2
	Life is a game	歌 Tug of war by Paul McCartney	1
愛	Love is a plant	My pretty rose tree by William Blake	3
		The sick rose by William Blake	2
		O, how much more doth beauty beauteous seem by William Shakespeare	1
		A red rose by Robert Burns	1
		Love and harmony combine by William Blake	1
	Love is a journey	歌 A whole new world by Alan Menken	2
		Wild nights! – wild nights! by Emily Dickinson	2
		O, how I faint when I of you do write by William Shakespeare	2
		Amor mundi by Christina Rossetti	1
		歌 Heaven by DJ Sammy	1
	Love is a quest	Love in a life by Robert Browning	1
		Life in a love by Robert Browning	1
	Love is food	So are you to my thoughts as food to life by William Shakespeare	1
	Love is a play	As an unperfect actor on the stage by William Shakespeare	1
	Love is unity	The bargain by Philip Sidney	1
時間	Time is a reaper	When I do count the clock that tells the time by William Shakespeare	1
		Like as the waves make towards the pebbled shore by William Shakespeare	4
	Time is a moving object	Punctuality by Lewis Carroll	1
		On his being arrived to the age of twenty-three by John Milton	1
	Death is a living thing	Death, be not proud, though some have called thee by John Donne	3
		Because I could not stop for Death by Emily Dickinson	1
人間	A woman is a jewel	I held a jewel in my fingers by Emily Dickinson	1
	A woman is an art	歌 Gallery by Mario Vazquez	1
	People are plants	The song of the rose by Edmund Spenser	3
		The human abstract by William Blake	1
		Love and harmony by William Blake	1
	Body parts are a person	Mine eye and heart are at a mortal war by William Shakespeare	1
感情	Anger is a plant	A poison tree by William Blake	2
	Happiness is rapture	In May by James Thomson	1
	Pain is natural force	Mad song by William Blake	1
その他	Sleep is release	Care-charmer sleep, son of the sable night by Samuel Daniel	4
	Thinking is grasping	Two in the campagna by Robert Browning	1
	War is a voyage	O captain! My captain! by Walt Whitman	1